

プラトンの認識論の分析

藤澤令夫

目次

第一部 知覚判断に於ける虚偽

A 論理的考察 (καταλογιστικῆς ἀποδείξεως) —「ソピステス」—

一、虚偽の判断一般に関する問題の提起

二、虚偽のロゴス及び判断の定義とそれに對する疑問

三、更に若干の疑問、方法の轉換

B 心理的考察 (καταλογιστικῆς ἀποδείξεως) —「テアイテトス」第二部—

四、知覚判断成立の過程と虚偽の判断の第一、第二條件

五、第三條件、認識論的問題への推移

第二部 所謂プロタゴラス説とプラトンに於ける知覺的認識の問題

一、プロタゴラス説

二、その一つの批判

三、「形相の友」(「ソピステス」二四八A)の所説——超越的實在論——とそれに對する批判

四、知覺の主観性・相對性といふこと

五、知覺(アイステーシス)の分析(1)

六、知覺(アイステーシス)の分析(2)、結論

プラトンの認識論の分析

第一部 知覺判斷に於ける虚偽

一

「對話篇「ソピステス」の主題、ソピストを定義しようとする試みを、その途中に於て一時中斷せしめるに至つた困難の一つは、虚偽の判斷乃至はロゴス (*ψευδὴς λόγος, ψευδὴς λόγος*) は果して可能であるか、といふ問題であつた。それは大體次のごとき構造を持つ。——今、大まかに言つて、眞實とは「事實あるところのもの」(*τὸ ὄν*)であるとすると、それに對立する虚偽とは、まさしく「ありもしないもの」「あらぬもの」(*τὸ μὴ ὄν*)を意味する。ソピストが言葉の魔術によつて、事物の真相に疎い人々の心に眞實ならざる考を植えつけるといふやうなことが、それまでのソピストの定義の試みに於て何氣なく言はれて來たけれども、實はこの嘘を言ふとか、虚偽を判斷するとからふことは、「虚偽」がこのやうに「あらぬもの」と置きかへられることによつて、「あらぬものを語り考へる」といふ意味に解されなければならぬとすると、甚だ厄介な事柄になつてくる。即ち、既に、同じ虚偽の判斷の可能性が問題にされる「テアイテトス」(一八八D—一八九B)に於て素描されてゐることく、知覺に於て我々が見たり觸れたりしてゐる場合、我々は少くとも何か一つのもの (*τὸ ἓν ἓν*) を見たり觸れたりしてゐるのと同様に、凡そ考へてゐる者は、何かあるもの (*τὸ ἓν*) をその對象として持つ、あらぬものを考へる (*ἄγ ὄν δοξάζειν*) とは、一つもなしものを考へること (*οὐδὲν δοξάζειν*) であり、換言すれば、一つも考へることのなきこと、全然考へてさへゐること (*τὸ καὶ οὐκ ὄν δοξάζειν*) に他ならぬものではなからうか。——といふ躰きの石となる反問が、この問題には常に用意されてゐるのである。

(一) *Soph. 236E* 「虚偽を語り考へることが實際に可能でなければならぬと言ふ人が、如何にしてさう言ひ乍ら、而も自己撞着

に陥らずに済むかといふことは非常に難事なのであるから、云々」

(11) Soph. 234CD

(12) Cf. Soph. 240DE

「虚偽の判断」——「あらぬものを考へること」といふ等式が、虚偽の判断の定義そのものとして、差當つてこれを變更することは許されぬとすれば、右の困難を解決するための正攻法は、困難の主要部分を形成するこの等式の擴大、即ち「あらぬものを考へる」——「一つもないものを考へる」——「何も考へない」と置くことが必しも正當ではないのを證明することであらう。つまり、「あらぬもの」必しも全くの無を意味せず、何らかの仕方であることが可能であることを示せばよいのである。そして周知のごとく、この目的のために「ソピステス」に於て展開される *hē ēn* に就ての詳細な議論(二五四B—二五九D)の結論は、この「あらぬもの」といふ言葉が、今まで用ひられて来た「一つもないもの」(*ōdēn*)「全然存在しないもの」(*to hēdōnōs ēn*)「あるところのもの」と正反對のもの」(*kontrōtōn tōō ēn*)とす意味の他に、或る何かと同じでなくとも「異つた別のあるもの」(*ēteōn ēn*)とす意味を持つといふこと、また、かゝる *ēteōn ēn* としての「あらぬもの」(例へば「美でないもの」)は、それが區別され對立せしめられる「あるもの」(例へば「美」と同様に「有る」を共有) (*hēteōn tōō ēn*)「多くの諸あるものの中に數へ入られるべき一つのエイドス」であるといふことであつた。かくして、この *hē ēn* = *ēteōn ēn* とす定式の導入によつて、「虚偽を考へる(判断する)」こと必しも「何も考へない」ことにならなくことが示され、「テアイテトス」で未解決の儘残された問題はこの「ソピステス」に於て充分な解決を見るに至つた、といふのが世の定説であるが、しかし果してこの所謂「解決」は我々を充分納得させるものであるか。この點を吟味するために、實際に虚偽の判断といふものが「ソピステス」に於て如何に定義されるかを、もう少し詳しく見てみよう。

(1) これらの完全なる無(*hē ēn tōō xaf' ēn*)は、*hē ēn* の考察が始まると直に (237D-238C)「考へることも語られることも發音されることも意味を持つことも出来ないもの」として、考察の外に追放される。

(二) Soph. 958C

二

ロゴス、判断 (*doxa* || 沈黙のロゴス)、思考 (*diánoia* || 精神の自己自身相手の對話)、パンタシヤ (*phantasia* || 「アステーシス」+「ドクサ」|| 判断が知覺を通じてなされたもの) 等の一連の心理的プロセスは、何れも互に緊密な親近性を持つ。そこでこの對話篇の主人公エレアの客人のとつた方法は、先づ虚偽のロゴスとは如何なるものかを考察しておいて、その同じ歸結を判断やパンタシヤに就て適用するといふ行き方であつた。彼は、同じく對話人物であるテアイテトスに關する二つのロゴス

(a) 「テアイテトスは坐つて居る」(*Geaitētos káthraí*)

(b) 「今私が話し合つてゐる」テアイテトスは飛んで居る」(*Geaitētos, tē lōv etiō dakētoíma, hēterai*)

を例示し、これを事實に訴へて (*proōízoítes an tou vōv etiō dakētoíma, 263E10*) 即ち、今この現在に於てテアイテトスは坐つてゐるのであるからといふ理由によつて、前者(a)は眞であり、後者(b)は偽であると決め、兩者を次のやうに具體的に定義する。——眞なるロゴス(a)は、テアイテトスに關して「實際にあるところの事柄をさうであるとして語つてゐる」(*hēterai tū ōnta ōs ēstai hēterai aútō, 263B4*) が、虚偽のロゴス(b)はテアイテトスに就て(1)「實際にさうであるとは異つた事柄を語つてゐる」(*ēstai tōv ōntōv se. hēterai hēterai aútō, 263B7*) (つまり(2)「實際にさうではない事柄をさうであるものとして語つてゐる」(*tā hē ōnta ōs ōnta hēterai, B9*) が、然し(3)「少くとも、實際にさうであるとは異つたものとしての、あるものを語つてゐる」(*ōntōv de te ōnta ēstai hēterai aútō se. hēterai, B10*)。——即ち、テアイテトスに就て語られたこの「ありもしないこと」(*tā hē ōnta*) は、先に見た *ēstai* の意味に於けるあらゆるものであつて、それはそれに對立する他のあるもの (*tā ōnta*) と異つてはゐるが、然

しや、やはり他の意味であるものであることには變りはない、といふ次第である。問題の虚偽の判断に就ては、例へばロゴス(b)の聲を伴はぬものとして、右の「語る」(ἀγείν)を「考へる判断する」(δοκιμάζειν)に置き換へれば、求めらる定義が得られるであらう。

(一) プラトニに於て、心理的プロセスとしてのロゴス・エトクサ・テイアノイアの同一視は普遍的である。Soph. 263E, 261A, Theaet. 180E, 180A, 206D, Philib. 38E, etc.

(二) この文章に於て *εἶπω* と *εἶπα* の兩語が *emphatic*。尙その他プラトンの真偽のロゴスの定義については「クラテュロス」(三八五B) 参照。

さて、疑問が起る。——今ここにテイアテトスが坐つてゐるといふ事實 (*παύειν*) があるとす。右の虚偽のロゴス(b)は、今の定義によると、この事實とは別箇の、然し少くとも別箇のものとしてあるところの事實を語るといふのである。だが謂ふところの「別箇の事實」——このロゴス(b)に對應する事實とは如何なる事實なのか。現存する事實はただ一つ、テイアテトスが坐つてゐるといふことのみであつて、今この現在に於てテイアテトスが飛んでゐるなどといふことは、何處を探しても見當らぬ事柄であつてみれば、そのやうな事柄が、如何なる意味にせよ、事實あるものであり得るか。それはそれが事實以外、の事柄である正にその故に、文字通りあらぬもの、全く存在しない事柄ではないのか。そしてもしさうだとすると、この虚偽のロゴス(b)は、最初に言はれてゐたやうに、一つもないものを語るロゴス、何も語つてゐないロゴスに過ぎず、それは虚偽と云ふよりは寧ろ、無意味 (*ἀόριστος λόγος*) であると言はれなければなるまい。即ち、我々は最初の困難を未だ少しも克服してゐないことになるのである。

とはいへ、何も語つてゐない無意味なロゴスと言つても、我々は、それが少くとも「テイアテトスは飛んでゐる」といふそのことを語つてゐることを認めない譯には行かないし、また、先のロゴスの真偽についての規定を、このやうに、或る一つの特種な事實との對應の有無の意味に解するのは、エレアの客人の眞意に沿ふものではないかもしれぬ。

事實彼は「ロゴス」といふものを、現實の特殊な事物に依存せず存在し得る「エイダス」(一つの言葉によつて意味される客観的な對象)の結合體として規定してゐるのであつて、先の「異つたものとしてあるところのもの」といふ意味も、次のやうに解さるべきであらう。虚偽のロゴス(b)の「飛ぶ」といふ言葉に對應するエイダス「飛ぶ」は、眞なるロゴス(a)に於ける「坐る」のエイダスではない、即ち異つてゐるけれども、然しエイダスである以上確固としてあるものである。⁽¹¹⁾——虚偽のロゴス(b)はこのエイダスといふ意味に於てあるものを語つてゐるからには、決して無意味でもなく、何も語つてゐないことにもならない、といふ風に。⁽¹²⁾

(1) Soph. 2nd SE.

(11) Cf. PSBC. そのまゝは「この「飛ぶ」の如き *εἰσέω* の意味(「坐る」ではない)に於ける *εἰσέω* が「ある」といふ點で他の何ものにも劣らず缺けるところのないもの」「確固として自らの本質を持つもの」「多くの諸々のあるものの中に數へ入れられべき一つのエイダス」であることが強調されてゐる。本稿前章末参照。「エイダス」の意味についてはパーネットの「パイド」*παιδο* に対する註 (Burnet, *Pl's Phaedo*) を見よ。

(12) Cornford, F. M., *Plato's Theory of Knowledge*, p. 314-317 参照。

然しこれは所詮、苦しい言ひ逃れに過ぎます。一つの言葉が「意味を持つ」などといふことは當り前の話しであつて、たとへ「エイダス」の名によつてその點をどれほど強調してみても、虚偽のロゴスに對應する事實が現實には存在しないことには、依然として變りはないのである。寧ろ、この虚偽のロゴスが「少くともそれが語る當のもの——テアイトテスが飛んでゐるといふそのこと——を語つてゐる」とか、「他のあるものとは別であるが、然しやはりあるもの」を語つてゐる」とかいふやうなことは、——例へば「エウテュデモス」(二八三E以下)を聞かれたい——そつくりそのまゝ、虚偽、不可能、論證に使はれる事柄なのであつて、もし我々が前とは逆に、虚偽のロゴスの語るものが完全なる無ではないことを強調するあまり、現實の事實との對應の缺如といふ點を忘れるならば、我々は再び、虚偽のロゴ

スが虚偽である所以のものを見失ふに至るであらう。

そしてこの對應の缺如といふことは、單に述語(「飛ぶ」)と、實際のテアイテトスの行爲(坐つてゐるといふ)との對應關係に就てのみ言はれるのではない。問題となるのは、主語(*ὁ πτόλις*)と述語(*ὀψία*)の各、が指し示す事物(*πτόλις*)と行爲(*ὀψία*)を合せた全體としての事實(*ὁ πτόλις ὀψία*)だからであり、或は寧ろ、このやうに二つ以上の要素に分解出来るのは、ロゴスの方だけであつて、そのロゴスが形成されるまでの過程に於ける、知覺判斷の對象としての事實は、決して要素の集合ではないからである。虚偽のロゴスは、「あるものの中の何か(テアイテトス)に就て、あらゆるもの異なるもの(「飛ぶ」)を語る」と規定されたけれども、然し實際には、「テアイテトスに就て何々を語る」といふ時のその「テアイテトス」は、たゞのテアイテトスではなく「坐つてゐるテアイテトス」(*ὄψιας ἕνεκα*)であり、ロゴス(b)はこの一つの事實との對應を缺いてゐるのである。「何々に就て何々を語る考へる」(*ὅτι καὶ λέγουσιν ὁμοίως*)の慣習的用法は、この「ソピステス」で例示されたとき、直接的な知覺判斷に基くロゴスに關する限り、その意味を失ふといはなければならぬ。

(一) 更に「クラテュロス」(四二九)参照。

(二) 山本光雄譯註「エウパテモス」p. 165-166 を見よ。

三

ここで最初の問に戻らう、虚偽の判斷乃至は、ロゴスは可能であるか。——先にエレアの客人は、虚偽のロゴスに就ての規定をそのまゝ思考や判斷やパンタシアの上に推し及ぼした。このことは、ここで考察されてゐる「ロゴス」が實際の事實と無關係に作り得る抽象的な「命題」ではなく、人が實際にさう認め判斷した上で發音される謂はば「生きた」ロゴスであり、従つて、知覺し判斷したことと口に出すことを分離することは出来ないといふことを意味する。

とすると、これまでの考察の結果と合せ考へて、我々の問題は、現實にそれに對應する事實を持たぬロゴスを、誰かの本氣で口にすることが起り得るか、といふ形に言ひ直すことが出來やう。

尤も、このやうなことは、それほど大袈裟に述べ立てるには及ばないかもしれない。我々はこの間に對して、人が實際に事實と違つたことを認め判断した時に起り得る、と答へればよいからである。が、「事實」とは何か。もし誰か本當にテアイテトスが飛んでゐるのを認めたとするならば、彼が認めたもの (*Geaitetos tiswano*) は、他の判断の内容 (*Geaitetos kathywano*) と同様の權利をもつて、まさしくその人にとつての嚴然たる「事實」と言ひ得るのではないか。——然し今はこの點を追及することを止めて、差當つてたゞ、ロゴスの眞僞がそれによつて分れる「事實」か否かを決めるものは、元をたゞせば、要するに知覺であること、従つて、「テアイテトスが飛んでゐる」といふロゴスが虚僞であることの最後の保證は、「見たまへ、現にテアイテトスは坐つてゐるではないか」と言ふことしかあり得ないこと、を指摘するに止めよう。「いや自分には飛んでゐるやうに見える」と言ひ張られたら、それまでなのである。

定式「あらぬもの」「異つてゐるもの」の導入、或は「ソピステス」で採用された方法一般の果し得る役割は、虚僞のロゴスの形式的な定義——若し存在するとすると、それは如何なるものでなければならぬかを式述することに止まる。ソフィストの定義が無意味に終らぬやうにといふ最初の意圖のためには、虚僞のロゴスなるものが果して實際に起り得るか、如何にして生ずるかを確めることが肝心だとすれば、また別の方法が補はれなければなるまい。それには——就中眞と僞の區別を決める「事實」の一番直接的な保證が知覺であるとすれば——先に見られたエレアの客人の議論の行き方とは逆に、我々の最も手近にあるペンタシアに於ける虚僞から出發して、順次判断、ロゴスへと廻る行き方が必要であらう。このやうな、知覺判断の虚僞が如何にして生ずるかを主觀的條件の方から探求してゐるのは、「テアイテトス」篇の所謂第二部の中、その一八七D—一九五Bである。

(1) コーソフォードは、プラトンの「ロゴス」をアリストテレスのそれと対照させつゝ特にこの點を強調してゐる。(Pl's Th. of Kn. p. 265)

(11) Cf. Theaet. 190C

(三) 人は「ソピステス」(二六三A—二六四B)を讀んで、そのエレアの客人の議論について、虚偽のロゴスといふものが存在するとすると、それは如何なるものでなければならぬかをアプリオリに決めておいて、それを何時の間にか、そのやうにあらねばならぬロゴスが、實際にある、起り得るといふことと置きかへてゐるといふ印象を受けないであらうか。

キヤムベル (The Soph. and Polit. of Pl., Introd. to the Soph. Ixxiii-Ixxiii) は、「虚偽のロゴスは可能であるか」といふことを「命題は個々の言葉(「美」「大」等)と同様に否定され得るか」といふ意味に解し、「テアイテトスは飛んでゐる」といふ命題は明に正當な否定の對象である。かくして虚偽の存在は、單純な否定(「非美」「非大」等)の存在と同様確立される」とあつさり片附けてゐる。従つて彼にとつては、眞偽のロゴスの例として擧げられた二つのロゴスの基く事實が「感覺的な經驗か或は他の仕方による經驗かは、證明にとつて重要でなく、人が本能的に斥けるやうな如何なる命題もこの目的に役立つ。感覺的事實が選ばれたのは、節約の法則によりそれが一番シンプルだからである」といふことになる。しかし我々としては、キヤムベルに向つて、「明白に否定の對象である命題」が、實際にさう認め判断されて發音されるか、と問ひ返さなければならぬ。そしてこの間は、見かけ程簡單なものではないのである。

四

「テアイテトス」篇に於ける虚偽の判断の主觀的條件からの探求にあつて、そのキー・アイディアの役割を果すものは「思ひ違ひ」(ἀλλοδοξία, στεροδοξία)とシムことであるが、この概念が實質的な意味を持ち、虚偽の判断の説明に役立つやうになるのは、所謂蠟板の比喻によつて記憶といふものが具體的に説明され、過去の知覺と現在の知覺と

- | | | |
|-----|------|---------------------------|
| [A] | (1) | $\alpha(-a), \beta(-b)$ |
| | (2) | $\alpha(-a), -\beta(-b)$ |
| | (3) | $-\alpha(-a), -\beta(-b)$ |
| | (4) | $-\alpha(-a), \beta(-b)$ |
| [B] | (5) | $(-\alpha)+a, (-\beta)+b$ |
| | (6) | $(-\alpha)+a, (-\beta)-b$ |
| | (7) | $(-\alpha)-a, (-\beta)-b$ |
| | (8) | $(-\alpha)-a, (-\beta)+b$ |
| [C] | (9) | $\alpha+a, \beta+b$ |
| | (10) | $\alpha+a, \beta(-b)$ |
| | (11) | $\alpha+a, (-\beta)+b$ |
| [D] | (12) | $-\alpha-a, -\beta-b$ |
| | (13) | $-\alpha-a, -\beta(-b)$ |
| | (14) | $-\alpha-a, (-\beta)-b$ |

(15)

$$\alpha+a, \beta(-b)$$

(16)

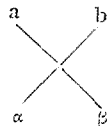
$$-\alpha+a, \beta(-b)$$

(17)

$$\alpha+a, \beta+b$$

(三) 例へば、ソクラテスが遠くから知人のテオドロスとテアイテトスを見て、テオ

ドロスをテアイテトスと思ひ、テアイテトスをテオドロスと勘違ひするといふやうな場合(一九三E、次のリストの(17))、テオドロスの知覚像記憶像を α 、 α 、テアイテトスのそれを β 、 β とすると、混同は $\alpha+\beta$ 、 $\alpha-\beta$ の間に起るのではなく、 $\alpha-\beta$ 或は $\beta-\alpha$ の間に起るのである。



(知覚像) (記憶像)

けれども勿論、このことは最少限の必要条件であるに止まり、決して充分な条件ではない。これだけでは真なる知覚判断の条件でもあつたからである。然らば第二の条件となるものは如何に表現されてゐるか。蠟板の比喩による記憶の説明の後(一九二A C)に於て、二つの対象が知られた(記憶された)ものであるかないか、現在知覚されてゐるかゐないかの、結局四つの条件の組合せによる全部で十四の虚偽不可能の場合と、三つの虚偽可能の場合のリストが挙げられてゐる。今、一方の対象に關する知(記憶)の有無を α 及び $-\alpha$ で、それが知覚されてゐるかゐないかを β 及び $-\beta$ で表し、他方の対象に關する知(記憶)の有無を α 及び $-\alpha$ 、知覚されてゐるか否かを β 及び $-\beta$ で表して、そこで言はれる通りを記して行く

○虚偽不可能の場合

と上のやうな表が出来る。

例へば(1)は「知つてはゐる」(α)が知覚してゐない($-\beta$)或ものを、やはり知つてはゐる(α)が知覚してゐない($-\beta$)他のものと思ふ。であり(2)は「知つはゐる」(α)が知覚してゐない($-\beta$)或ものを知ら

ない(一)し知覚もしてゐない(一)他のものと思ふ」である。以下これに準ず。括弧をつけてあるものは、テキストでは直接言はれてゐないが、しかし豫想されてゐるものを示す。

先ず虚偽不可能の場合の中、「D」のグループに屬するものをみると、二つの對象は何れも知られても居らず、知覚もされてゐないのであるから(この點に於て「A」の(3)、「B」の(7)も同じ)事實上ナンセンス、また「A」「B」は、我々の第一の條件によつて虚偽の不可能は明白である(即ち、「A」は二つの對象が何れも現在知覚されてゐないから、問題は記憶像相互間の關係になるし「B」は逆の理由によつて、問題は知覚像相互間の關係になる)。残るは「C」であつて、これは我々の第一條件を具備して居り(即ち一方の項にaがあれば他方の項にb、一方にaがあれば他方にbがある)、又事實この條件からのみ云へば、表に見られる如く、組合せの式は虚偽可能の場合と全く同じものが屬してゐる(9) || (17)、(10) || (15)。そこで、後者から區別するために、組合せの式には表れないけれども、(9) (10) (11)が述べられるに當つて附加される「その印影を知覚の通りに保持してゐる(εχειν τὸ σφικτικὸν κατὰ τὴν αἰσθητικὴν)ならば」とか、「記憶を間違ひなく保存してゐるならば」(εχειν τὸ μνηστικὸν ὁμοίως)とかいふ條件が必要になつてくる。即ちa+n₂或はb+n₂の項に於ける記憶と知覚との結合が完全であれば、たとへ一方の項に記憶(a或はb)、他方に知覚(m或はr)があつても「思ひ違ひ」は起らないといふのである。この條件、つまり逆に云へば「一方の對象の知(=記憶)を知覚の通りに保持してゐない」(τὴν γνώσιν τοῦ εἰσθητοῦ μή κατὰ τὴν αἰσθητικὴν εἶχειν, 193D)場合に初めて虚偽が可能となるときは、右のリストが實例によつて説明される際に、虚偽の可能な場合と不可能な場合を對照しつゝ繰返し強調されるところであつて、我々はこの記憶と知覚の結合の不完全性といふことを、知覚判斷に於ける虚偽が生ずる爲の第二の條件として擧げることが出来るであらう。

(一) 田中美知太郎譯註「テアイテトス」五〇四頁參照。

(二) 193D-194A; Cf. D. Peipers, Die Erkenntnistheorie Platos, S. 94-96 參照。

(三) たゞ先のリストの (16) の場合——一九一Bに於て對話人物テアイテトスが擧げる「遠くから見知らぬ他人を見てそれを自分の

知つてゐるソクラテスと思ふ」といふ實例がこれに當る——をどう處理するか問題になるであらう。組合せの式には $\alpha + \beta$ も $\beta + \alpha$ も含まれてゐないから、「一方の對象に於ける記憶と知覚との結合の不完全性」といつても、一見意味をなさぬからである。しかし、右の例に於て見知らぬ人の知覚像 (a) が知人ソクラテスの記憶像 (β) と結びついたといふことは、言ひ換へれば

〔(16)の場合〕



〔(15)の場合〕



本来ならばソクラテスの知覚像 (b) ——但し今の場合には知覚されてゐないからマイナスの符號を取つてゐるが——と結合すべきソクラテスの記憶像 (β) が、誤まつて他の見知らぬ人の知覚像 (a) と結びついたといふことであつて、これもやはり一方の對象(ソクラテス)に關する記憶と知覚との結合の不完全性と云へるであらう。もしソクラテスの記憶像 (β) を間違ひなく保存してゐるなら、 β はソクラテスの知覚像 (b) が現れた時に初めてそれと結合すべきであるのに、その間の結合關係が不充分である爲に、 β が b とではなく、見知らぬ人の知覚像 (a) と結びついて了つたのである。そしてこのやうに、或る知人の記憶像 (β) がその同じ知覚像 (b) と結び付かずに、他の人の知覚像 (not b) と結びつくといふ點に於て、この (16) の場合は、(15) の實例として考へられる「知人テオドロスを見て (a)」、それを他の自分の知つてゐる人ソクラテス (β) と思ふ」といふ場合と實質的に同じである。即ちこの (16) の場合といへども、組合せの式に $\alpha + \beta$ 或は $\beta + \alpha$ がないからといつて、その虚偽可能の第二の條件となるものが、記憶と知覚の結合の不完全性であることには變りはないのである。

田中教授「テアイテトス」五〇三頁)は、この (16) の場合は $\alpha + \beta$ 或は $\beta + \alpha$ の式(教授の記號で云へば A+B) が含まれてゐないといふところから、「一方的な知と知覚の結び付きは虚偽可能の條件とはならない。條件となるのは……「遠くの方から見る」といふやうな知覚のみの條件である」この場合は知覚と知の結合の不完全によつてよりも、寧ろ知覚の不確さによ

つて説明される」と解釋されるが、「遠くの方から見る」といふやうな知覺の不確かさといふ條件は、次に我々が見る如く、他の虚偽可能の場合にも共通の條件であり、且、それは知と知覺の結合の不完全性といふことと原因・結果の關係にあるものであつて、同じ次元の條件として取扱れるべきものではないのではなからうか。

五

そして更に我々は、この記憶と知覺の結合の不完全性の由來する條件として、例へば「遠くから見る」といふやうな、知覺の不確かさといふことを考へることが出来る。前章の初めに見た誤れる再認一般の説明(一九三B D)では知覺の條件として「遠くの方からで充分に見られない場合」(δύ μακρόν καὶ ἴσχυραὺς ὄψασθαι, 193C1)とあり、また一九一Bで挙げられる「思ひ違ひ」の實例にも「遠くの方から・見」(ἰσχυρόθεν ἀεὶ ὄψασθαι, B1)と言はれてゐる。はつきりと見えないから、誰だか、分らないのである。つまり、先の記號で言ふと、 a もしくは b が明確でないために、 a — a 間及び b — β 間の結合が妨げられて、 a が a と結合せずに β と結び付き、逆に他方から云へば、 β が b と結合せずに a と結び付くのである。

かくして我々は、「テアイトス」に於ける知覺判断の虚偽に就ての考察を、次のやうに要約することが出来る。虚偽の判断とは、「思ひ違ひ」、即ち「人があるものの中のを思考上の取違へによつて、別のあるものの中の何かであると言ふ」(一八九C)こと、と定義出来るが、知覺判断の場合に於ては、その「思ひ違ひ」は「思考」(≡記憶)と知覺の取違へ」(διαφορά τῶν ἀσθητικῶν παραλήψεῶν, 191C3)であつて、それが生ずるための條件は、取違へられるべき二つの對象の一方に於ける記憶と知覺との結合の不完全性であり、そしてそれは更に、「遠くの方から見る」といふやうな、知覺の不確かさといふことに由來する、——と。

(一) 「ピレボス」(三八七)に於ける虚偽の判断の具體的説明でも同様のこと、「遠くから見て、見られたものが餘りはつきりない場合」が述べられてゐる。

(二) 問題は記憶と知覚の結合であるから、この知覚の不確かさと對應して、他方に記憶の不確かさといふものも考へられて然るべきであらう。尤も、記憶と知覚の結合の完全不完全といふことは、「記憶を知覚の通りに保持しない」「記憶を間違ひなく持つ」等の言ひ方からも分るやうに、或意味で記憶の正確不正確と同義語であるともいへるけれども、この外、記憶の座としての、かの要素材そのものの質的並びに量的條件の如何といふことが問題にされてゐる(一九四C—一九五A)。しかしそのやうな先天的素質の虚偽の判断の原因の一つとして考へられるとしても、それは要するにそのやうな不其の素質を持つ人についての言はれ得ることであつて、一般に誰にでも當はまる條件としては、やはり知覚の不確かさといふことを擧げるべきであらう。

さて、先に我々は「ソピステス」に於て、判断の眞偽を決定する「事實」なるものの最後の保證は、要するに各人の知覚であることを確かめたが、今また「テアイテトス」に於て、虚偽の判断の條件は結局知覚の不確かさといふことに還元されてしまつた。かくして、或る他人の判断の誤りを證明しようと思へば、先に「見たまへ、現にテアイテトスは坐つてゐるではないか」とくり返す以外にすべがなかつたと同様、ここでも、「もつと近よつて見よ、あれはソクラテスではなく赤の他人ではないか」といふほか、何も手段はないことになる。然し、現に自分でテアイテトスが立つてゐるのを見、向ふに見える人がソクラテスであると信じてゐる人にとつては、これらの言葉は何の説得力も持たないであらう。既に些か觸れるところあつた如く、各人が自分自身経験するそれらの知覚内容は、如何に人から誤りと言はれやうと、各人自身にとつてのその時々⁽¹⁾に於ける「事實」と呼ばれる権利を持つのではないか。

——「クラテュロス」(三八六DE)を見ると、我々はそこに、物事といふものは、我々にどのやうに現れるかによつてあれこれと變化するものではなく、各、その固定した⁽²⁾在り方を持つものだ (*αὐτὰ αὐτῶν ὁρίαν ἐξοῦτὰ τῶν*

Politeia *isari ta politikarion*) と云ふ趣旨の、一連の主張を見出す。一般に二つの異つた判断の中、一方が真であり、一方が偽であることが根本から言へるためには、何かこのやうな事物の一定性、その瞬間に於ける「事實」が一つしかないこと、各人の知覺に現れるものがそのまゝ真ではないことが、前提として確認されておなければならぬ。何か尺度乃至は基準となるものがない限り、各人の様々の判断の中、特にそのどれかを偽であると決める根拠がないことは、正に我々が充分思ひ知らされたところである。このやうな前提に對しては、然しながら、右の「クラテュロス」の主張がそれ對するアンティテーゼとしてなされたものであることから知られるやうに、プロタゴラス説が眞向から抗議する。何故なら、この説は、各人が各人なりに知覺し判断するところのものが、そのまゝそのやうな尺度(メトロン)に他ならぬことを標榜するものであるから。虚偽の判断の可能性の追求は、元をたゞせばソフィストの定義のためであつたが、今我々は、證明の根柢的な根據付けを獲得すべく、更に存在論或は認識論的な領域に於て、そのソフィストの總元縮ともいふべきプロタゴラスの所説に對して戰を挑まなければならぬのである。

(1) Cf. Theact. 200A 3, 6.

第二部 所謂プロタゴラス説とプラトンに

於ける知覺的認識の問題

—

プロタゴラスの名に於て傳へられる「萬物の尺度は人間である」⁽¹⁾「ものは各人に現れる通りに事實またあり、もする」⁽²⁾等の命題の含意思想は、「テアイテトス」(一五二A以下)に於て、對話人物テアイテトスの知識に對する暫定的定義

——「ものを知る」とはそのものを知覚することである——の思想的背景をなすものとして紹介され、徹底的に展開されてゐる。

(一) 知覚の主観性・流轉性、同時に眞實性。例へば眼で白いものを見るといふ場合、この「白色」と呼ばれるものは特定の場所にそれ自體で固定して存在するものではなく、眼といふ「作用を受ける機能を持つもの」と對象物といふ「作用を及ぼす機能を持つもの」との交はりによつて、兩者の中間に各人各様に異つて生ずるもの (*Heraiōn te ekūstōn toion reitōn*) である。といふのは、凡ゆるものは常に生成變化の過程にあるから、作用を及ぼすものとしての對象物、受けるものとしての眼、何れもこの不斷の變化を免れることは出來ず（この點に於てプロタゴラス説は「萬物流轉」を説くヘラクレイトス主義と直結する）、従つて、斯く變化しつゝある兩者がそれぞれの瞬間に生ずる知覺内容は、それぞれ瞬間によつて絶えず異つたものでなければならぬからである。かくして何人も、全く同一内容の知覺を二回持つことは不可能であり、また勿論、如何なる二人の間も、或る對象から同じ知覺を受け取ることとは出來ない。そして——これが大事な點であるが——各人がその時々々に知覺によつて把握するそれらの内容は、何れも各人にとつて眞であり、實際にさうあるところのものである。

(二) 然しながら、この世には夢や精神病、また一般に「錯覺する」(*trapaisthēsan*) と呼ばれる事態が存在する。切實に知覺され、ありありと現れてゐる物事が、そのまゝ眞實にありもするどころか、すべて皆虚妄の影にすぎぬといふ、これらの場合に於ける紛ふべきもない虚偽の知覺 (*phantasiazēn*) を如何に説明するか。——この間に對してプロタゴラス説は、逆に次のやうに反問する。一體誰が夢見る人と覺めてゐる人の間に立つて、一方の見るものは虚偽（事實でない）であり、一方は眞（事實）であると決めるのか。夢と現實とは全く酷似してゐて (*nōtra tūōntōn dūrtōpōga tā aītrā pōpōkolōubēi*, 138G3) 兩者を本質的に區別する何ものもない。今自分達が話し合つてゐるこの状況を、そのまゝ夢の世界の出來事と考へるのに、何の妨げもないではないか。精神病とても同様である。

或る酒の辛さが病體のソクラテスにとつて事實であることは、その酒の甘さが健康體のソクラテスにとつて事實であるのと少しも變らない、それと全く同じ理窟で、たとへ普通人の知覺が多くの人と共通性を持つに反し、狂人の言ふことは常人にしか通用しないからといつて、前者が眞であり、後者が偽であると決める根據はさらにはないのである。

(三)それでは、もし謂ふがごとく、各人が知覺によつて判断するものが悉く各人にとつて眞であり、判断の眞偽判定の能力に於て、各人が無差別に同等の權利を有するといふのであれば、或人が他の人より「賢い」といふことがどうして可能であるか。他人に對する如何なる優越性によつてプロタゴラスその人は、「智者」として他人に師事され、そして自ら智の尺度である筈の他の人々は、智の劣つた者として彼の教へを受けなければならなかつたか。——プロタゴラス説は答へる。^(六)智者の存在を否定する意志は毫もない。寧ろ次のやうに積極的に定義されるべきである。曰く、「或る人に現れてゐる状態が悪いものである場合、轉じて良い状態が現れるやうにさせる人」(一六六D)こそ正に智者であり、各分野に於ける専門家といふものである、と。例へば教育とは、間違つた判断をなす者を導いて、正しい判断をなすやうにさせることではない。人は自分の體驗に背馳してこれと異つた事柄を判断するといふことは出来ぬ以上、そして各人が自ら體驗する事柄は何れも眞である以上、虚偽の判断などといふものはありえないからである。教育とは、劣悪な精神状態の故にそれに相應した劣悪な判断をなす者をして、その精神状態を良好にし、以て同じく良好な判断をなすやうにさせることであつて、智と無智の區別は、この變化する前後の二つの精神状態の間にはなく、たゞこのやうに、精神状態をより良い——そしてより「眞」ではない——ものへと變化させる能力を持つかどうか、といふ點にのみ成立つ。かくして、人と人との間の智の優劣は、このやうな意味に於て認められなければならぬけれども、然し既に何人も虚偽の判断をなす者はゐない以上、各人は「欲すると欲しないとに拘らず、一個の尺度であることを我慢して貰はねばならぬ」(一六七D)のである。……

(一) 普遍と個物、抽象的存在と具體的存在の區別が未だ明確に意識されないプロタゴラスの時代に於ては、端的に「尺度は人」

と言はれる時、その「人」は、この人、かの者といふやうな個々の人間として——然し一般的な人間の概念から全く區別されずしてしまふやうでなく——自然に理解されたであらう、とキヤムズン (The Theat. of Pl., App. B, p. 254) は言つてゐる。

Burnet, Gr. Ph. p. 115 及び田中教授譯註「テアイタトス」p. 373 参照。

(四) キヤムズン (Iurid. XVIII) は、「テアイタトス」を紹介される所謂プロタゴラス説の中、確實に歴史的プロタゴラス自身のものと同推測されるものとして、この二つの命題を擧げてゐる。

(三) Theat. 153D-154A, 156A-157A

(四) Ibid. 157E-158E

(五) Ibid. 161C-E

(六) Ibid. 166D-167D

二

この教説の基礎的な假説であり、且最も重要な認識論的特色をなすものは、前述の(一)に在るが、考察の便宜上、先づ(三)を取上げることによつてこれと對立するもう一つの認識論的立場を導入し、兩者を綜觀しつゝ(一)に對する根本的吟味を加へることにする。第一部で殘された問題への解答は、我々がこの(一)を檢討するに及んで與へられるであらう。プロタゴラス説が、前章の(三)に見られたごとく、各分野に於ける智者或は専門家の存在を承認したことは、既に事實上、その「尺度は各人」の主張が——純粹の知覺的 *λογικῶν κριτῶν* の領域に於てはともかく——「思慮の點に於て」(ἐν τοῖς φρονηματικῶν, 169D3) は成立しないことを告白したことに他ならぬ。難戦難病難航等の非常事態に遭遇する時、我々が頼りにするのは、その道の専門家としての將軍や醫者や水夫であつて、何も知らない自分達ではないといふ事實が示すやうに、専門的な知識を持たぬ者は、彼がその知識を持たないその分野に於ては、尺度となり得ないことは明

白だからである。⁽¹¹⁾にも拘らず、プロタゴラス説が尙も最後まで「尺度は各人」のスコーガンを抛棄しなかつた根據は一つに掛つてたゞ虚偽の判断といふものがあり得ないといふことにあつた。けれども、「悪い状態を良い状態に變化させることの出来る人」といふ智者に對する上述の定義は、同時に智といふものを、確實に成功する手段を心得てゐること、換言すれば未來の状態を間違はずに豫め判断し (προβλεψάν) 得ることとして規定してゐるのであつて、このことはまた、判断といふものがプロタゴラス説そのものにとつても、謂は經驗の二つの状態——現在與へられてゐるものと未來に於て與へられるであらうところのもの——を仲介するといふ豫見的役割を持つことを示す。もし我々がこの經驗の二つの状態の中、未來の部分を切捨て、たゞ現在に於ける自らの思考の状態を確めることに止まるならば、凡ゆる判断は自己の中に感ずる播がし難い確信として残るのは當然であらう。これは、考へられることはその瞬間に於て考へられるといふ同一律の持つ確實性にすぎない。然しながら、判断の實質性が右のやうに、現在と未來を仲介することに在るとすれば、もはや「何であれ各人があるであらう」と思つたものは、またその通りにさう思つたその人に對して生ずる」(一七八C)といふ譯には行かないであらう。⁽¹²⁾即ち、例へば未來の病狀に關して醫者と素人の意見が對立したといふやうな場合、それらの判断には、一方の言ふことが當り、一方が當らないといふ意味に於て眞と僞の區別が生じ、そしてこの未來の事實によつて檢證されるものとしての判断の眞僞 (ἀληθείας-ψευδής) を、現在の思考の状態としての良と劣 (καλός-κακός) に解消しようとしても無駄である。プロタゴラス説が認める智と無智との區別からは、このやうにして、プロタゴラス説が認めることを欲しなかつた眞と僞の區別が、必然的歸結として導き出されるのである。換言すれば、未來の判断、現在と未來の結合といふことを無視して智者或は諸、の學問知識を定義することは不可能であるのに對して、「各人に思はれるものは各人にとつて眞」といふ命題は、我々が純粹に與へられた瞬間的現在にのみ生き得るといふ假定の下に始めて成立し得る。この定義とこの命題を同時に主張することの矛盾は、今や明かであると云はなければならぬ。

このことはつまり、プロタゴラス説の主張が許容される限り、學問や知識の存在が不可解となるといふことであるが、この歸結は、もし我々がこの説の持つヘラクレイトス主義の側面——前章の(一)——をまともな受け取るとすれば、蓋し當然であらう。^(四) 何故なら——「萬物流轉」の假設に最後まで従ひ、あらゆるものはあらゆる仕方で絶えず運動し變化するとしてみよ。「この花は白し」と言ふその瞬間には、「この花」は既に「この花」でなく、「白」は最早白くはない。我々が何か言はうとして口を開けてゐる間に、對象は我々の表現を潜り抜けて流れ去つてしまひ (*dei kētoros hēnēsōxera: ūre dū'pōou, Theaet. 182D7*)、而も言葉そのものにさへ同一性一定性がなしとしたら、我々は——クラテュロスがさうしたと云はれるやうに——物を言はずに、ただ指だけを動かしてゐるより仕方があるまい。このやうな最も徹底した意味に於て同一性の缺如した世界、「矛盾」といふ言葉さへが意味をなさないやうな世界にあつては、一切の思考論理の根本法則は何の役にも立たなくなり、到底學問や知識などといふ沙汰ではない。「如何なる知識と雖も、どのやうな状態にもないものを知るなどといふことはなし」(「クラテュロス」四四〇A)し、また元々、「『知るべきもの』も『知られるべきもの』もあり得なし」(同B)からである。

(一) Theaet. 170A

(二) Ibid. 171C, 179B1

(三) Ibid. 178A-179A

(四) Ibid. 181B-183C, Cratyl. 439Bff.

三

人が學問、知識の存在を説明するために、プロタゴラス説の妥當領域である個人的瞬間的な知覺の世界とは別に、「知る」ことの對象として、或る不變にして自己同一を保つ客觀的な存在を何らかの形で假定するに至るのは、右の

やうな徑路によつてである。⁽¹⁾そして、流轉する主觀的な知覺の世界 (τὸ αἰσθητὸν, τὸ φαινομενικόν) をそのまゝ實在と考へるプロタゴラス—ヘラクレイトス説の如き主觀的觀念論に對して、他方に、この知覺の世界を超越して常に自己同一を保つ思考の對象となる世界 (τὸ νοητὸν) を假定し、これを存在の基本形式と考へる超越的實在論ともいふべき認識論的立場が考へられうる。「何か巨人の戦ひのやうなもの」として「ソピステス」(二四五E以下) に於て語られてゐる存在に關する二陳營の間の争ひ、今も昔も、絶えず行はれてゐる (ἀεὶ αὐθιγάσκειν, 246C3) 巨大な戦ひといふのは、丁度この二つの立場の主張の對立を述べたものと見ることができよう。即ちそれによると、一方の人々は、木や岩の如く固んだり觸れたりすることが出来る物體のみが存在すると主張し、これに對して他方の人々は、前者が實在と認める知覺(この場合觸覺)的世界を、實在ならぬ動いてやまぬ生成の世界と呼び、その後、思考の對象とはなるが觸れることの出来ない諸、の「形相」(νοητὰ ἄρτια καὶ ἀαίματα εἶδη) を、眞實在界として設定する、⁽²⁾ —といふのである。我々は今度は、この後者——そこで「形相の友」(αἰ-τῶν εἰδῶν φίλοι) と呼ばれてゐる人々の立場——を吟味しなければならぬ。

この立場の主張の基調となるものは、「ソピステス」で引続き(二四八A) 紹介されてゐることく、(I) 實在の世界の生成の世界(=知覺の世界)に對する絶對的超越性 (τελευτῶν, τῶν δὲ οὐρανῶν κοπιῶν τοῦ θεοκρίτου κέρτε) 及び(2) 斯く區別された二つの世界に應ずる二つの對立的な認識の仕方——即ち、肉體=知覺による生成の世界との交はり、精神=思考による實在との交はり (ἀψυχῆ καὶ ψυχῆς τελευτῆς δι' αἰσθησῶν κοινωμένην, διὰ λογισμῶν δὲ οὐρανῶν πρὸς τῶν οὐρανῶν οὐρανῶν)——であつて、⁽³⁾ 考察を要する問題は、この場合にあつては前とは逆に、如何にして彼らが基本的實在と考へる非知覺的な世界から、我々が現に見たり觸れたりしてゐる知覺的世界を説明するか、或はこの全く性格を異にする二種の存在體系の間の關係は如何、といふことである。

けれども、右の假設からこの問題に解答を與へることの不可能は初めから明白である。何故なら、知覺的と非知覺的

の二つの世界の間の絶對的區別、即ち兩者が全く無關係であるといふ前提から、兩者の關係を説明することが、如何にして可能であるか。この根本前提に忠實である限り、我々は永遠に相接觸することのない二箇の存在體系を前にして、手を拱いてゐる他はない。實在するものと知覺されるものとは、その定義により、各々が他方に缺けてゐる丁度そのものだけを持つのである。従つて、もしその一方を彼らの主張に従つて「實在」と呼ぶならば、それと何らの共通點も持たぬ他方の世界は——事實パルメニデスがそこまで行つた如く——非存在、或は虚無と呼ばれるべきものとなるのは論理的必然であらう。とはいへ、知覺の世界は現に我々に與へられてゐる。如何に虚無と呼ばれやうと、尙さう呼ばれる當のものとして依然存在する。超越的實在論は、だから、何とかしてこの世界を説明する義務を持つと言はなければならぬ。

が、この試みはすべて徒勞に歸するより外はない。二つの世界の間の橋渡しをするために、眞實在界の知覺される世界に對する超越性の程度に些かでも手加減を加へるならば、再び前の主觀的觀念論の立場に逆戻りすることになるからである。——我々の世界の諸、の赤、諸、の熱ももの原因 (*áiton*) となる「赤」「熱」の形相を眞實在として假定することは、既に可能態に於て知覺の對象を實在と考へることに他ならぬ。物體の「第一性質」として想定された目に見えない微粒子 (*átonon*) は、單に變形された觸覺に過ぎない。我々はこのやうな「赤」「熱い」の形相として實在を立てることによつて、またこのやうな微粒子を存在の形式と考へることによつて、何れも知覺によつて把握されるものの持つ、先に見られたやうな流轉性、相對性を實在に對して許すことになるであらう。

逆の見地から考へると、實在の世界と知覺される世界との餘りにも完全なる遮斷は、實在の世界と我々の世界との完全なる遮斷を意味する以上、眞實在は我々にとつて不可知のものとなる恐れがある。「ソピステス」(二四八B—二四九A) に於ては、「精神による眞實在との交はり」を主張する彼ら「形相の友」は、その交はる (*knowen*) 仕方ほどのやうにしてゑあるかと問はれて、遂に答へることが出来なかつた。同様に「パルメニデス」に於ける、「も

し人がそれ自體で獨立に存在するものを形相と定義するならば、「一三三A」といふ假説に始まり、「美自體、善自體、また我々がイデアそのものであると考へるすべてのものは、我々にとつて不可知のものとなる」(一三四BC)といふ結論に終る一つのアポリアも亦、この點を指摘する。が、「知る」ことの對象として知覺物以外に假定された眞實在の不可知性——これは最早「實在」それ自身の *raison d'être* の喪失でなくして何であらう。

(一) Cf. Parm. 133BC 及び Arist. *Metaph.* A 1987a30ff; M F 1078b12-32

(二) 我々はこの一方の立場に於て、「現れる世界」を把握する知覺が、たまたまこの場合の如く觸覺であらうと、或は他の感覺器關によるものであらうと、それは末梢的な問題であつて、二つの立場の根本的な差異は、知覺に現れる世界をそのまゝ實在と認めるか、或はこれと獨立に他の超越的な存在を假定するかといふ點に在ると考へる。そしてこれが、我々が前者の立場を通當云はれる如く「唯物論」と呼ばずに、更に包括的な「主觀的觀念論」といふ名を與へる(何故ならこの立場は、知覺に現れる世界の持つ主觀性をそのまゝ存在の基本的な在り方と考へるのであるから)理由である。この「ソピステス」で述べられる二つの立場が、哲學史上の如何なる特定の學派を含むかについては諸説紛々であるが、我々はそれらの穿鑿を一應無視して、テキストに見られる言葉の範圍内に止まり、右のやうな見地から、これらを今日に至るまで變らぬ認識論の二つの典型として把握することとする。「この箇所ではプラトンは何時もさうであるが——哲學してゐるのであつて、哲學史を書いてゐるのではな」(Conford, *Pl.'s Theory of Knowledge*, p. 230)

(三) Cf. *Platodo*, 78D, 79B

四

さて、これらの困難は何れもプラトンその人の問題であつた。「知る」ことの確固たる對象となるべき實在の世界は、流轉する知覺の世界から完全に引離されてこそ、初めてその存在理由があるにも拘らず、この離在もしくは超越性 (*transcendence*) そのものがまた、右のごとき困難を提供し、そしてその困難解消は、我々の知覺する個々のものが、何ら

かの仕方で實在を共有する (*metazēn, kolouōsetu*) ことをまつて初めて可能である。が、一方に於けるこの *zōpōtōs* と他方に於けるこの *hōlēstis (kōrouōn)* とは、相互に全く相容れぬ矛盾概念であり、この二つの概念を原理として同時に並立するには説明を要する。——定説に従つて我々も亦、先の「ソピステス」に於ける形相の友に對する批判、「パルメニデス」(一三〇E—一三一E、一三三A—一三四E)に於ける老パルメニデスの青年ソクラテスに對する鏡の追及、或は「ピレボス」(一五BC)の所謂一と多の問題への注意の喚起等を、何れも、初期作品に於て「單純に、無技巧に、愚直に」述べられたイデア論の *zōpōtōs* と *hōlēstis* にまつはる困難が、プラトン自身によつて反省されたものと見ることが出来やう。然らば我々は、例へば「パイドン」(一〇〇CE)に於ける、超越的實在「美そのもの」の共有がこの世の諸、の美しいものの原因であるといふ主張を、中期・後期の作品にみられる考へ方を材料として、認識論的によつて根據づけるか。

先に見られた二つの相反する認識論の立場——問題は元々、原理的にこれ以外の立場はありえないと考へられるこの二つの立場の、その何れを採用しても共に一つの障礙に逢着するところから生じた——には、一つの共通の見解がある。それは、知覺によつて把握される世界が、凡ゆる意味に於て主觀的であり、相對的であると考へる點である。たゞ一方がそれをそのまゝの形で實在と見なすのに對して、他方はこれを虚妄の世界と考へ、實在はまた別に想定するところが、兩者の異なる點であつた。そして兩者とも、一旦このやうに知覺の世界が主觀的相對的であると決めてしまふため、これ以外には他の存在様式を認めない主觀的觀念論にとつては、當然萬人に共通する普遍的客觀的な知識の對象が不可解なものとなるし、他方超越的實在論は、もし些かでも彼らの實在に知覺物と共通のものを許せば、正にそれだけ實在に主觀性相對性を導入することになるので、文字通りの「二世界説」に陥り、知覺の由來するところのものを説明することは永久に不可能になる。兩者の含む困難、そしてまた我々の出會はなければならなかつた困難はここに在つた。然らば我々は推測する、この共通の假定にこそ、——知覺の世界が凡ゆる意味で全く主觀的相對的

であるとするこの見解にこそ、兩者のやはり共通の誤謬が潜んでゐるのではないか。我々の考察は、かくして、この見解を typical に標榜してゐた、前述のプロタゴラス説の主張の(一)に及ばねばならぬ。

その主張の(一)に於て、プロタゴラス説は、我々の知覚内容が各人各様に現れ、同一個人に對してさへも決して同じものとして現れることはないといふ事實を指摘してゐた。これが普通、我々が知覚の主観性相對性といふ時の意味であるが、この事實を更に裏付ける根據として、例へば我々が目を閉ぢれば視覚像の全體が消滅するといふやうなことから類推により、知覚する我々の消滅によつて知覚される對象も消滅し、その意味で知覚作用に於けるすべての factor は、完全に知覚する各人自身のみを屬するやうに思はれるといふことが考へられる。事實プロタゴラス説に於ては、その主張の(二)に見られた如く、夢の中に見るものと現實に見るものとは同じ資格を持つものとされた。といふことはつまり、我々の知覚作用が、夢と全く同じやうに、我々から獨立に存在する外的對象がなくても、單に我々の内的状態——即ち身體の状態——のみによつて作り出すことが出来るものとして考へられてゐることを意味する。そして實際、知覚の主観性相對性といふことは、知覚をこのやうな性格のものとして考へることによつて極めて理解し易い事柄となるし、また初めて實質的な意味を持つことが出来る。

五

例へば我々は、このやうな種類の知覚に屬するものとして、「テアイテトス」(一五六B)でアイステーシスの名の下に一括されてゐるものの中から、快樂 (Joy) と苦痛 (Pain) を取出して見よう。「ピレボス」(三一D—三二B、四三A C等)は、これらの知覚が、身體内部で不斷に生じてゐる大小様々の細胞的變化が意識によつて把えられることによつて成立することを説明する。即ち、その身體内の變化が自然状態に反する方向をとる時は苦痛、正常な調和状態への復歸の過程の場合には快樂、といふ風に。これらの身體内部の變化は、勿論我々の身體の消滅によつて同じく

消滅するし、また我々自身以外の他人の全く與り知らぬものである。従つて、そのやうな身體内部の状態そのものを對象として持つ快苦の知覺は、そのすべての factor が全く知覺する個々人のみに屬するといふ意味に於て、まさしく「主觀的」の名に値するといへやう。

では、これらの特殊な場合を除けばどうか。プロタゴラス說そのものが前提する知覺說——これはプラトン自身の知覺說でもあると言はれてゐる——によると、作用を及ぼす機能を持つものと受ける機能を持つものとの交はりにより、一方には知覺するもの——例へば「見てゐる眼」——が、他方には知覺されるもの——例へば「白い」といふ性質——が生れるといふのであるが、この場合、實際に知覺作用が行はれてゐる時の「見てゐる眼」と對象の「白い」といふ性質とは、一つの統一的全體を形成してゐて、プロタゴラス說の強調する如く、作用を及ぼすもの、受けるものといつても、それぞれ單獨に固定した何かであると考へることは出来ぬと云つて差支へない。然しながら、原理的には、「眼から出る視覺と、白色を生むもの(對象物)から出る白色とがその間を運動して、一方眼は……見てゐる眼となり、他方白色を生むもの(對象物)は……白くなる」(一五六DE)といふ言ひ方からもうかゞはれるやうに、「對象物—白い」と「眼—見てゐる眼」とは相互に獨立のものである。又もしさうでないならば、元々この知覺作用は、一つのものから生ずるのであつて、作用を及ぼすもの、受けるものといふ二つのものを想定する必要はなかつたであらう。ところで、「眼はその時見てゐる眼となる」といふ時、實際に「それによつて見てゐる」(αὐτοὶ ὁρῶντες)としての知覺の主體は精神 (ψυχή) であつて、それを通じて見る (ὁρᾶν ἢ ὁραῖν) とこの道具としての眼ではないこととは、「テアイトス」(一八四BD)で注意されてゐる通りである。そして知覺とは、この道具を通じて受け取られたもの (παθητὰ) が、一種の衝載 (εἰς ὁραῖον) として精神に到達することによつて生ずるものであるから、この「見てゐる眼」といふ言葉の意味する内容は、道具としての眼から精神に至る衝載の全系列であり、従つて「眼—見てゐる眼」から獨立の「對象物—白い」は、この眼から精神に至る衝載の全系列から獨立に存在するものでなけ

ればならぬ。即ち、「白い」といふ知覺内容は、原理的には、我々から獨立に存在する對象そのものの性質なのであつて、また、この知覺作用に在つて、身體内部の状態である眼から精神までの衝戟の系列は、決して知覺成立過程全體と等値のものではない。かくして先の特殊の場合とは異つて、その對象が我々から獨立に——従つて他人と共通のものとして——存在するといふ正にこのことによつて、一般に知覺作用には一種の客觀性が保證される。知覺は原理上、夢と同じものではないのである。

(一) Theaet. 156A11. 所謂「プロタゴラス説奥儀」。

(二) Philob. 331

(三) 「ティマイオス」(六四D)では、快苦と普通の知覺とは、はつきりと異質的なものとしての取扱ひを受けてゐる。

六

他方然しながら、右の分析が示すごとく、知覺作用に於て身體は勿論重要な役割を果す。知覺とは、「客觀的」な對象物を「主觀的」である身體——何故なら身體とは言葉の完全な意味で主觀的な(つまりその身體の所有者以外の人間の興り知らぬものであるところの)——大小の細胞的變化が不斷に行はれてゐる場であるから——を通じて把握する過程であり、それは、主觀的條件と客觀的條件との相互依存によつて成立つ。知覺によつて把握される内容は、従つて、この主觀的條件——知覺する個々人の瞬間々々の身體内部の變化——によつて多かれ少かれ左右されなければならぬだけ、丁度それだけ個人差と流轉性が生じ、客觀的對象の性質にこの身體内部の側面を混入するといふ意味に於て、「主觀的」なものとなる。

知覺の内容が各人各様に現れ、又何人も同じ内容の知覺を二回持つことが出来ないといふ、プロタゴラス説の強調する事實の意味するものは、このやうな事柄であり、そして決してそれ以上ではない。指摘される現象は事實として

と「テアイトス」で呼ばれるものは精神である。従つて、謂はれるが如き純粹に「身體による (sômatik) 交はり」なるものがあるとすれば、それは精神の興らぬ無意識的過程でなければならず、これに當るものとしては、先の特殊な知覺から意識を除き去つた謂はば潜在的な快と苦——即ちかの身體内部の大小の變化——が考へられる。そしてもしそうだとすると、我々の知覺は、それが「ビレボス」(三四A)で「精神と身體とが一つの狀態に於て一緒になつて動くこと」と定義されるごとく、丁度この「身體による交はり」と「精神による交はり」との混合といふべきであらう。従つて、眞の對立はこの混合される兩者の間に在つて、「知覺による交はり」と「精神による交はり」の間にはない。知覺と對立するのは寧ろ、不知覺 (ánáisthês, Phil. 33E) と呼ばれるものであつて、これは無意識的過程であるといふ點で、また「精神による交はり」とも對立するものである。かの「形相の友」がしたやうに、知覺作用を全體として眞實在との交はりから除外することは、知覺の主體である精神までも眞實在と無關係にしてしまふことであり、彼らの陥つたアポリア^(B)はこのことに由來する。本當は眞實在が全き意味で超越的存在であるのは、「身體による交はり」とその對象に對してはあつて、知覺の世界は眞實在を文字通り共有 *κοινωνει* してゐるのである。このやうにして眞實在を或意味に於て知覺的なもの (gnôstikôn) とすることは、然しながら、もはや決して實際の知覺内容が持つ主觀性と流轉性を眞實在に許すことにはならないし、また所謂感覺物の永遠化の誤謬を犯すものでもない。何故なら、知覺によつて眞實在をそのまゝの姿に於て認識し得るといふのは、實際に於てははたなく權利上に於てであり、知覺からそれを主觀的ならしめる身體的側面を除去した上のことであるから。現實には、我々が生きてゐる限り、即ち知覺が身體を通じて行はれてゐる限り、知覺によつて把えられるものは、「かの眞實在を憶れてはゐるが然しより劣つてゐる」ことを免れ得ないし、實踐的にたとへ我々が、肉體的影響を制する努力と訓練とによつて、我々に可能なる限り純粹な認識に近づくことが出来たとしても、然し眞實在は、それを超えた彼方の極限に、永久に模範 (*παράδειγμα*) としつ留るべきである。

(一) Cf. Phaedo, 79C, 81B, 82E, 83B, 83D, 84A; Tim. 69D etc.

(二) 本稿四〇頁。Soph., 248A

(三) 存在を嚴格に知覺的と非知覺的、變化するものと自己同一を保つものと、等の二つの相反する型に區別するこの「形相の友」の主張が、「ハイドン」七八D以下の敘述と全く同種のものである。R. H. Cornford (P. T. K. p. 212-214) リッター (Platon, II, S. 132) 等の指摘する如く、「形相の友」の名の下に語られる所説が、プラトン自身の初期作品に於ける主張の少くともその一面を含むことは否定出来ないのであらう。従つて我々が彼の中期後期作品から演繹し得た結論としてここで述べる「形相の友」の説に對する言葉は、そのままプラトンの初期のイデア論の認識論的側面にも當てはまるのである。勿論、我々が見るやうに、存在を二つの秩序に分けるその圖式は根本的には修正する必要がないのであつて、また事實プラトン自身も、後期作品である「テイマイオス」(二七J以下)その他に於てこの圖式を再現してゐるのは周知のごとくである。

(四) Soph., 248B-249A, 本稿四一頁。

(五) Phaedo, 74D-75B.

—一九五一—

(筆者 京都大學文學部大學院「西洋哲學史」學生)

ENGLISH OUTLINES OF THE MAIN ARTICLES IN THIS ISSUE

The outline of such an article as appears in more than one number of this magazine is to be given together with the last instalment of the article

An Analysis of Plato's Epistemology

By Norio Fujisawa

(A part of his B. A. thesis)

The article analyses Plato's epistemological theory as it is found in his middle and later works (mainly *Theaet.*, *Soph.*, *Phileb.*), examining in particular the part played therein by perception (*αἰσθησις*). It is stated that perception is to be understood as "the process of grasping the constant being of objects (*βέβαιος οὐσία*) subsisting independently of us, by the soul (*ψυχή*), through the body (*διὰ σώματος*)", giving thereby answers to two questions.

(1) How false judgements of perception are possible.—Our perception has as its object the constant being of something independent of our body; therefore, what each man perceives cannot be indifferently "true" (i. e. equally a "fact"), in spite of what the Protagorean type of theory insists upon in the *Theaetetus*.

(2) How the simultaneous supposition is possible of *μέθεξις* and *χωρισμός*—two principles contradictory to each other—in regard to the relation between "what is real" (*τὸ ὄν*) and "what is perceived" (*τὸ αἰσθητόν*).—

(a) What is grasped by perception participates in (*μετέχει*) reality. For perception *suo iure* has as its object "what is real", that is to say, the constant being of things.

(b) "What is real" stands distinct (*χωρίζεται*) from "what is

perceived". For since our perception is exercised through our body and thus is inevitably subject to temporary conditions of our bodies, "what is perceived" cannot but suffer from individual differences and be also liable to change, so that it is impossible that the constant being of the object should be grasped as it is by means of perception.